

平成 26 年度
日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック
第 7 回 海外研修 報告書
2014 年 11 月 22 日～25 日（カンボジア）



日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック



【日 時】 2014年11月22日(土)～11月25日(火) ■ 2泊4日(機中泊1泊)

【旅行先】 シェムリアップ(カンボジア)

【募集人員】 20～25名

【旅行代金：福岡発着】 ¥139,800(2名1室利用) / ¥159,800(1名1室利用)

【旅行代金：沖縄発着】 ¥149,800(2名1室利用) / ¥169,800(1名1室利用)

【申込先】 (有)SQUARE 福岡市中央区天神5-10-1 TEL:092-717-7177

☆ 1日目【2014年11月22日(土)】

14:10 福岡空港国際線ターミナル集合

16:10～17:40 福岡よりアジアナ航空でソウルへ(乗換) [昼食:機内食(軽食)]

19:15～22:40 シェムリアップへ [夕食:機内食]

～ホテルへ

【シェムリアップ泊】

☆ 2日目【11月23日(日)】

終日観光(アンコールワット、アンコールトム、タ・プロムなど) [朝食:ホテル]

[昼食:レストラン]

[夕食:レストラン]

【シェムリアップ泊】

☆ 3日目【11月24日(月)】

① ハンディキャップセンター

Physical Rehabilitation Center and Information Center

地雷で手足をなくした人達がリハビリに励む施設です。

毎日10人程度がリハビリに通って来られます。

リハビリの様子の見学が可能です。

② 孤児院訪問

SCSA (Save the Children's Smile Association) JAPAN

日本のNGO&NPOが運営をしています。

現在は12名が入所しており施設の見学が可能です。

今までは折り紙や日本語を教えて子ども達と交流したり、

昼食にカレーを作り一緒に食べたりなどの例があります。

③ アーティザン職業訓練所

Artisans Angkor

農村に住む若い人々が故郷にて仕事ができるように設立された施設です。



木彫り、シルクの機織り、漆塗り、金属工芸などの技術トレーニングの様子を見学できます。

現在、900人程度の職員が在籍しています。

夕食後：ナイトマーケット～空港へ

アジアナ航空でソウルへ

【機中泊】

☆ 4日目【11月25日(火)】

[朝食：機内食(軽食)]

06:50 ソウル

09:30～10:50 (乗換)福岡へ

※【宿泊ホテル】ロイヤル アンコール リゾート & スパ (Royal Angkor Resort & SPA)

参加者名簿&報告書該当ページ

	氏名	施設名	役職	県	報告書
1	岡田 好清	善隣保育園	園長	熊本	P.1-2
2	甲斐 國英	熊本乳児院	院長	熊本	P.3
3	山田 茂樹	スカイ保育園	園長	愛知	P.4
4	石丸 翠	社会福祉法人 福翠会	理事長	長崎	P.5-6
5	森 恵律子	いちご保育園	園長	長崎	P.7-8
6	金澤 武典	星光園	施設長	熊本	P.9-10
7	川上 淑江	桜荘	所長	長野	P.11-12
8	秋山 奈津江	桜荘	—	長野	P.13
9	坂田 昌子	(株)らくだトラベル	代表取締役	福岡	P.14-15
10	安達 照二	(有)SQUARE (添乗員)	代表取締役	福岡	—

日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック

平成 26 年度 海外研修報告

日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック 会長
熊本県 社会福祉法人 善隣福祉会 善隣保育園
園長 岡田 好清

九州・沖縄ブロックでは、平成 26 年度海外視察研修を平成 26 年 11 月 22 日から 11 月 25 日までの日程で、カンボジア・シェムリアップ市で実施した。本ブロックでは、「福祉の原点を学ぶ」という趣旨で、アジア諸国の中の福祉施設を対象に毎年度、海外研修の機会を設けている。

今回は 7 回目となり、事業としてはそれなりに定着してきているが、回数が増すごとに訪問国や訪問施設の選定等、当然のことながら研修の目的に沿うことが求められ、選択肢の狭まりを感じさせられている。

今回は全社協国際部でもルートがないということで、旅行会社を通じて現地エージェントの紹介を得て企画実施の運びとなった。当初、20 名ほどの参加者を想定しての企画であったが、締切日を過ぎても応募が少なく、4～5 名という数字に一時は中止若しくは延期かと危ぶまれる始末で、思案に暮れる状況であった。数 10 回の電話での誘いも含め参加者募集に四苦八苦した結果、どうにか添乗者も含め 10 名の参加を得たが、案内時期、参加対象者の範囲、目的地の選定、日程の組み方等、今後の実施に向けての課題が多々生じた。

さて、今回の訪問先カンボジアは、ポルポト時代の負の遺産もあり、アジアの中では最貧国の一つである。苦難の時代を経ながらも別称『微笑みの国』といわれるよう、多くの人々の笑顔に接し救われる思いがした。現地での初日は、日曜日ということもあり、世界遺産のアンコールワットを終日見学。欧米系を含め観光客の多さに圧倒され、遺跡の規模に驚嘆し、歴史の重みを実感。歩行距離の長さや暑さも加わって、感動の中にも年配者にはハードな行程であった。

今回は現地滞在 2 日目で、一日をまるまる研修に充てることになり、ハンディキャップセンター、孤児院、シルク織の職業訓練センター等の施設を訪れ、最後に農村地区に赴き、サプライズ事業として井戸の贈呈式を行った。訪問施設の様子の詳細については、参加者の各レポートを参照して頂き、本文では団長としての感想を述べたい。

第一に、訪問先の選定。今回は我が国と対極ともいべきインフラも未整備で、経済的に厳しい状況下のカンボジアを訪れたが、農村部の生活環境にはカルチャーショックを覚えるほどギャップの大きさを感じるなど、コミュニティを支える基盤は助け合いなくしてありえないという現実、本会の研修趣旨に照らして正解だったと思われた。

第二に、突発的ではあったが、現地で日本語を指導されている方とその生徒たちとの出会い。同行の山田さんの発案で、急遽食事会に招待し、ガイドも含め現地若者たちとの交流会を催した。彼らは、日本への憧れが強く、将来福祉分野での外国人労働者雇用を検討する際、これまでの訪問国同様に繋がりを作る契機になりはしないかとの思いから、国際的な人的交流を深めていくこ



との大事さを考えた。

第三に、井戸の提供。スクエアの安達さんから事前に提案を受けていたが、サプライズということで参加者には当日まで内密にしていた。既に井戸は完成しており、現地でも使用されていたが、贈呈式という場を設け、参加者一同への披露と村人との交流というサプライズイベントを行った。劣悪な水事情が一変した村人の喜びは大きく、大変感謝された。このことから、私たちのささやかな志を浄財という形にして支援ができることを実体験することで、福祉施設士会としても何らかの貢献が可能なことと、社会的認知度を高める一助にもなるのではないかという思いを強くした。第四に、今回は初めて井戸を贈呈したが、物質的支援だけでなく福祉に関する制度や技術面での援助や指導もこれから検討する余地があるのではないかと思われた。第五に、研修に臨む姿勢。少人数の参加者であったが、訪問施設で熱心に質問をしたりメモをとる姿に真摯に研修と向き合う気持ちが伝わり、本会の学習団体としての特性を示すことができた。当たり前といえばそれまでだが、これからも基本姿勢は崩さないようにしていきたい。

最後に、今後この事業を継続していく上で、前述した諸課題を踏まえ更に発展させるために何をどうするのか問い続けていきたい。二泊四日のややハードな日程であったが、本来の目的と参加者同士の親睦交流を深めることができたことを喜ぶとともに感謝している。また、現地でのガイドさんや訪問施設の方々の温かい歓迎に改めて謝意を表したい。特に、企画の段階から“サプライズ”案を練り、様々な面で助けていただいたスクエアの安達さんには大変お世話頂いた。改めてお礼申し上げます。今回の研修を通して参加者各位の施設の中での活動に何らかの得るものがあれば望外の喜びであり、これからの参加者各位の活躍を期待したい。



[一口コメント]

高校生の世界史で習ったアンコールワット、今回その意味が寺院のある邑であることとカンボジアがポルポトの悪夢と地雷の時代を経てきたことを実感し、日本の平和に改めて感謝した。

[レポート本文]

今回は2月にフィリピン視察を終え、年度変りの視察ということが家族には理解不能で第7回目の完全無欠の海外視察も殆ど無視に近い状況の中を、11月22日午後からの福岡空港集合に向けて我が家を後にした。福岡よりソウル仁川空港経由でシェムリアップへ。

時差はマイナス2時間である。到着が現地時間で真夜中になったが、蒸し暑い中、日曜日ということもあり、アンコールワットの朝日を見物に寝ぼけ眼で参加。そこで現地の物売りにカモにされたり、アンコールトムでは日本語に釣られ他団体にくっついて迷子騒動を引き起こす始末。夜は性懲りもなく岡田会長の部屋でアンコールならぬアルコール決起集会。明けて朝からバスでハンディキャップセンターへ。ここは設立時はベルギー財団の所有であったが現在はカンボジアの所有に。しかし財政的には厳しく寄付が主たる財源であり、元は地雷の事故による被害者が多かったが、現在は交通事故による者が多いとのことであった。

次にSCSAという日本のNPOの運営による孤児院を訪問。運よく國本理事長が北海道から来ておられ、子どもたちが人身売買の被害者であるとの話に乳児院長として胸が痛んだ。最後はアーティザン職業訓練所に行ったが、何とここは福祉施設ではなく営利目的の企業体であった。その分主たる製品であるシルクは安価でした。それから郊外の村落の井戸の通水式（既に井戸は使用中）に村中の人の歓迎を受けて参加。本会からの寄付金の使いみちについて深く考える契機となった。

夜はナイトマーケットを冷やかし、空港へ向かい、機中泊でソウルから福岡行きの機上の人となった。1975年から3年に及ぶポルポト時代は知識人の虐殺で教育や地雷で多くの傷跡を残したが、人々は明るく、東南アジア諸国では未だ発展途上国ではあるが、日本の様に豊かさ故の貧困ではなく、貧しさ故の人と人との絆を感じることができた。この国の未来は明るいし、夕食を共にした日本語学校の生徒たちも日本に憧れていて、私も祖国の歪み行く格差社会と社会保障制度が綻びつつある現実を彼らが知らずに済むような日が来ることを願って止みません。岡田会長をはじめ皆様、仁川空港でも再び迷子事件を起こしたことをこの場を借りてお詫びとお礼を申し上げます。



【一口コメント】

私は、九州・沖縄ブロックの海外研修会は、マレーシア・シンガポールとベトナム、フィリピンに続き4回目の海外研修会参加で有りました。今回のカンボジアも興味深く大変楽しみにしておりました。

【レポート本文】

2014年11月22日(土)より中部国際空港から出国し、韓国ソウルにて九州・沖縄ブロックの皆様と合流をさせて頂き、一路カンボジア・シェムリアップ空港に降り立ちました。



滞在1日目は、世界遺産である、アンコールワット等を視察。



初日の夜の食事会に、現地国際日本文化学園の学生と記念撮影。

11月24日は、①ハンディキャップセンター、②孤児院、③アーティザン職業訓練所を訪問。



(上段左から)ハンディキャップセンター所長と。昼食(海鮮鍋)。2日目昼食現地料理。

(下段左から)孤児院撮影3枚。井戸の贈呈記念写真2枚。

<一口コメント>

第5回ベトナム研修より…自分探しの機会にしたいと3度目の参加です。忙しい時期にアジアに行って何の参考になるの？という息子を見捨て、振り切って参加。帰国後、保育園の発表会、特養の交流会等があり、ご父兄、ご家族のご意見を伺う。自己中心的な苦情ばかりだ…？ ハングリー精神で朝5時～塾に行き一生懸命な子ども達の生きる姿を見た私には、幸せとは何か？これが苦情なのかと憐れみさえ感じてしまう。核家族化、生活の多様化、経済発展の裏で、何かを忘れたような気になった。日常に追われ、おごりと傲慢になりがちな自分と向き合い、反省し、感謝をし、再チャレンジャーでよ～し頑張ろう。

最後に、事前準備、サプライズ等ご準備頂きました役員の方々、旅行会社のご苦勞に対し心より感謝とお礼を申し上げます。

<レポート本文>

平成26年11月22日、14時福岡空港集合。懐かしいメンバーと合流。二泊四日の旅の始まり。16時10分発、ソウル乗換、22時40分シエムリアップ到着。深夜0時ホテル到着。移動の一日でした。

早朝5時集合。暗い内にアンコールワット到着。懐中電灯でポイントに着き、霞の中から絵葉書で見たアンコールワット。朝日が眠たい目を感動で覚ましてくれる。今回は、少人数でよく歩きました。終日観光。

3日目。ハンディキャップセンター

Physical Rehabilitation Center and Information Center

地雷で足をなくした人達がリハビリに励む施設です。

毎日10人程度がリハビリに通って来ています。リハビリの様子をはじめに見学します。サボンさんという説明者によると、リハビリ指導、義足の調整、スタッフは18人で、リハビリ指導者3人。ベルギーの団体が始めた施設で、政府が引き継ぎ政府とボランティアで支援。無料で治療ができる。1週間のシフトで、治療中一人3,000リエルの食費を支給。宿泊は6人部屋で提供。

施設に来るときは、自分で交通費は負担してくるが、治療が終わって帰るときは、1,000リエル支援される。

その後9か月ごとに義足を補修でき、足がなれたり、作り直したりを数回繰り返し、安定できるとその後は5年に一度になる。最近、交通事故の利用者も多くなり、その場合は300ドルいただく。

孤児院訪問

SCSA (Save the Childrens Smile Association) JAPAN

驚いたことに日本のNGO&NPOが運営されていました。子ども達の笑顔を守る会の支援者で北海道の國本京子さんよりお話を聞く。



世界遺産で有名なアンコールワットの街シムリアップから車で30分ぐらい山の方へ行ったロリュオス村にあり、途中車がやっと通れる道らしきところを通る。集落があり、各国のボランティアの井戸の寄贈の看板も見ながら、山道を揺られ到着。3年8か月に及んだポルポト時代の傷跡。悲しい時代の残存で、両親を亡くした子ども達、虐待を受けている子ども達が保護され、フランス系の施設を受け継ぎ、6歳～18歳の11名の児童がいる。学校が足りないため、午前午後に分かれて授業を受けている。早朝は塾に通う。午後、学校から帰ってきた子ども達は、日本語で自己紹介してくれる。高校1年の18歳タントン君。レアさんの将来の夢は、主な産業資源が観光であるためか目をキラキラさせ日本語の観光ガイドになりたいとのこと。明るい笑顔が印象的で、この国の未来を予感させるようです。

カンボジアの子ども達に綺麗な水を

孤児院を後にもっと険しい山の中へ。途中いくつもの井戸の寄贈の看板を見る。途中から車で行けないので歩いて、歩きながら川を覗く。黄色の濁った水が流れている。それが生きる源になる水。シムリアップの町から少し離れた場所では、こんな水で生活をしている。昔の日本のような畔道に牛の糞を踏みそうになる。汗だくでやっと到着。稲刈りの時期で男たちはいないが、女たちと子ども達の歓迎を受け、ココナツにストローを刺し一人一人に配られた。精一杯の感謝だろうと思う。飲んでみると、生ぬるく飲むことができない。一口飲んでおくと、どうぞどうぞとジェスチャーと笑顔で何度も言われる。とにかく明るい。スーパーもマーケットも何も無い。牛、犬、猫、人間の子ども、赤ちゃん、大人もすごく痩せている。自給自足の生活が窺える。

セレモニーが始まり、ボール、水鉄砲など配り、子ども達と一緒に遊ぶ。人懐っこい笑顔で明るい。これからのカンボジアを担っていく子ども達。役に立つことができて本当に良かった。



【一口コメント】

小学2年生の夏休み、長男がカンボジアの孤児院で過ごす体験をした。帰国後の長男の感想は「水ば、大事にせんば」だった。帰国後、お風呂に入り、「あー」との声がもれた。「カンボジアでは頭を洗った水で、身体を洗わんばと」「井戸掘りもした」「冷たいジュースはなかった」「蜘蛛のてんぷらは、炊き立てご飯の味がした」「アンコールワットの近くに骸骨の山があった」「足がない子とも遊んだ・・・」等の話であった。そんな8年前の息子の話を思い出しながらの出発だった。

【レポート本文】

1番目の訪問先は、ハンディキャップセンターだった。本来は、地雷で手足をなくした人達がリハビリに励む施設だったが、その後、生まれつき足が弱い人の為、交通事故や脳卒中後のリハビリへと対象者も変化している。リハビリも、自主的なものであった。運営はカンボジア政府の支援と寄付のみ。センターが、利用者に食事代として75円/日を支給する。1週間ほどのリハビリ（装具ができる期間）後、センターを出る時に4,000円を車代として支給する。平均収入が1万円/月に対し、4万円ほどの装具も無償である。さぞや利用者が殺到しそうであるが、その利用者の選定は政府が実施するために、希望通りとはいかないようである。

2番目の施設は代表が日本人の孤児院であった。運営が、日本のロータリークラブなどの寄付で支えられていることが目に見えて判った。発起の理由の中で、人身売買の対象となる子ども達の悲痛な現状を知った。代表者は、「小さいうちは、とにかく食べて大きくなって、勉強させたい。」と語っておられた。カンボジアの学校は未整備で、午前か午後の半日のみであった。また、クラスも50人単位である。施設の子ども達11名の自己紹介は、全て日本語だった。その後の案内でも、カンボジアのみかんが甘くておいしいこと、熟する日を楽しみにしていることなども、日本語で話してくれた。本当に日本語が上手だった。代表が日本人だからなのであろうか、日本を学ぼうとする意欲に魅かれた。

3番目の施設は、職業訓練所であった。暑いなか、集中して細かい作業をする姿に、日本との大きな異なりを感じた。日本では、敬遠されがちな作業が、花形の憧れの作業であった。環境の良い、綺麗な場所で、楽な仕事を好むのではなく、やりがいや誇れるものとして取り組んでいる姿が眩かった。

サプライズとして、井戸を寄贈した。言葉も通じない人達、初めて出会う人との、心の交流に、今まで体験したことのない心もちを感じた。バスを追いかけ、いつまでも見送ってくれる人々の思いと、1万円の価値を考えた。参加者9人、1万円/人で、一つの村に井戸が整備できるのだ。なんとも感慨深い経験であった。

アンコールワットまでの道だった。葉っぱで装飾をし、葉っぱで籠をつくり、歌を歌う子ども達の姿があった。親がさせているのだろうか？自分達で考え、行動しているのだろうか？身近にあるものを活用し、できることを実践している姿に、電子映像メディアとの接触時間が世界一長く、自己肯定感の低い、日本の子どもの姿が思い出された。何が幸せなのだろうか？

中学3年生の息子の宿題に「税金」があった。息子は、資本主義のメリットを書いていた。小学6年生の娘の授業に「税金の必要性」のプレゼンがあった。税金は幸せに生きていくためになくてはならないものだ、教育のなかで学んでいた。諫早市の22人に1人が生活保護世帯である。保護世帯の子ども達も塾に通っている。文化的で、潤いのある生活をする権利があるのだといわれる。

現地のナイトマーケットで5歳ほどの子どもに案内を受けた。子どもに仕事をさせてはいけない。夜の10時頃、そんな遅い時間に出歩いてもいけない。いけないが、日本の18歳以下の子どもの自殺者が、1日1.7人という数字は、もっといけないことではないだろうか。

インフラ整備が未発達で、社会保障のない、教育の行き届かない国かもしれないが、笑顔の国カンボジアには、子ども達の笑顔の輝きや、学ぶ意欲、就労者の誇りなど、未来への活気が満ちていた。



【一口コメント】

私個人としては3度目の海外研修に参加致しました。カンボジアという国のイメージは史跡や隣国との戦争というものでしたが、現地の発展に関わる福祉関係者や日本人に触れる機会をいただき、東南アジアにおける福祉の原点を知り発展途上にある福祉現場より多くの学びを与えていただいた貴重な研修の機会となりました。日本福祉施設士会九州・沖縄ブロックの皆様にあらためて感謝申し上げます。

【レポート】

初日の移動日は午後福岡を出発、仁川を経由し一路カンボジアのシェムリアップへ。出発がゆっくりだった分、現地への到着は23時近くとなりましたが、そんな時間にもかかわらず空港は大変な賑わいでした。世界的に有名な観光地「アンコールワット」のお膝元ということで、一年を通して活気に満ちた空港だそうです。

そのアンコールワットですが朝焼けがとにかく見物だそうです、午前1時の就寝にもかかわらず午前4時半には起床し見物に出かけることとなりました。噂通りのアンコールワットの美しさもさることながら、日の出前にもかかわらず数百人にも及ぶ観光客にも目を奪われます。その日は日曜ということで、視察は翌月曜日に予定されていました。そこでアンコールワットはもとより、アンコールトムやタ・プロムといった史跡などを巡ることになりました。アンコール王朝時代の歴史に触れ、感慨もひとしおです。

町並みを見て感じるのは、隣国であり敵国であったベトナムに比べ、発展のペースが遅いことを感じます。アメリカ資本を積極的に取り入れたベトナムに対し、戦時中はアメリカが支援したにもかかわらず、まだまだ発展途上にあるカンボジアに戦争の皮肉を感じます。

翌日はハンディキャップセンターの見学から始まりました。Physical Rehabilitation Center and Information Center という名称で、一言で言うと補装具の製造とリハビリセンターが一体となった施設です。主にベトナム戦争時代の遺物である地雷被害により足を無くされた方が義足を作り、生活上不便のないよう扱えるまでリハビリを行います。また、地方から来た人向けに一定期間の宿泊、いわゆるショートステイをしながらの訓練も可能とのことでした。特徴的だったのは歩行訓練用の障害物に瓦礫や砂利道などが用意されていたこと。舗装路の少ないカンボジアではそのような路面に対応することが現実的なのだと感じました。また、ニーズが高い義足として、義足のまま田んぼなどに入ることができるタイプがあるということもお国柄だと思います。

二箇所目は日本のNPOが設置・運営する孤児院 Save the Children's Smile Association を訪問しました。ここには12名程度の子どもたちが生活しており、そのほとんどが人身売買に巻き込まれた経験があるということで、そこから救われた子どもたちにとっては、孤児院での生活とはいえ今は幸せな環境であるとのことでした。日本のNPO法人「子どもたちの笑顔を守る会」の運営ということもあり、日本に対する感謝の気持ちも強く、積極的に日

本語を学んでいる様子で片言の日本語での会話もできるようでした。たまたま法人代表の國本京子理事長も滞在しておられ、団体についてや理事長なった経緯、子ども達の様子など伺うことができたのも幸運だったことかもしれません。

三カ所目は職業訓練所の Artisans Angkor という施設です。施設といっても、いわゆる福祉に特化した施設というより、就労に恵まれない人々に就労の場所と技術を学ぶ機会を提供しているところで、カンボジアの中でもシルク産業の拠点と位置づけられているような場所です。かなり大がかりな団体でもあり、国内に同様の施設が数カ所あるとのことで、総数では900人も訓練生がいるとのこと。案内人には日本人もおり、他に多くの見学団体もいました。ここで学んだ技術を出身地に持ち帰り、生業とする人も多いとのこと。

最後に支援活動としてシェムリアップ近郊の村への井戸支援が用意されていました。すでに井戸自体は完成していましたが、その引き渡し式を兼ねた訪問です。

村を訪れるとほぼ全員の村人で出迎えてもらい、身体全体で感謝の気持ちを表して貰いました。我々にとっては「たかが井戸」ではありますが、住民にとっては悲願の物だということがヒシヒシと伝わります。それまでは近くにある、とうていきれいとは言い難い池から水を汲んで利用していたそうですが、これからは井戸が村の水源として活躍しそうです。水鉄砲のお土産を持参しましたが、最初緊張していた子ども達も少しずつにこやかとなり、別れる頃には満面の笑みを見せてくれました。

冒頭に書いたように同じ戦争を戦い抜いたベトナムとカンボジアですが、現在に至ってみるとベトナムと隣国であるタイの経済発展はめざましく、挟まれているカンボジアは少し取り残された感すらあります。福祉の面でも同様に国が支えるというより、まずは家族が支えるべきという考えが一般的のようでした。障害のある方向けの施設にしても、児童・子どものための施設にしても、その対象となる人たちには未だに戦争の傷跡が色濃く残っているように感じました。貧困など自分たちの力だけではどうしても解決できない部分を、海外の人々の力が支えていることを実感できる旅であったと同時に、福祉の力をより多くの人に実感して貰うには、国の富と安定も欠かせないということも感じ取れました。そのときがくるまで、我々日本人をはじめ、支援が可能な多くの人々の力も重要だと思います。私も機会があれば必要としている人々のための支援に、積極的に関わっていきたく強く思う旅でした。



[一口コメント]

今回の研修はカンボジア4日間という短期間の中で、初日が日曜であったためアンコールワットの壮大な世界遺産の鑑賞も出来て、足腰を鍛えられ、「福祉の原点を学ぶ」という目的にも沿い、三施設の訪問が出来ました。カンボジアの復興と発展の原動力となる人たちの生活を応援したいと思う気持ちになる旅であり、楽しいふれあいがありました。

[レポート本文]

ハンディキャップセンター訪問

農業国であるカンボジアでポルポト時代(1975~1979)に地雷で手足をなくした人達がリハビリに励む施設であり、毎日10人程の人達が通っている。みんな農家なので自分達の工夫で数々の装具が作られた過程が展示されていた。地雷で人を亡くし、当時は薬品やワクチンもなかった。障害になり自殺した人もいる。

現在は11ヶ所(うち国立2ヶ所)のリハビリ施設がある。ハンディキャップのある人達に対し、内戦後から2012年まで1日述べ1,000人の人達が利用したそうだ。そこでは相談に応じたり、1週間装具をつけてリハビリを行うなど、6か月に1回チェックをされておられるとのこと。義足は300ドル相当の価格だが無料である。2012年からカンボジアの国立も出来たが、ベルギーの機関が行っていた頃に比べると貧しくなった感じがすると言われる。

感心したことは、建物はささやかなものであっても暑い国なので開放的に作られていて、手近かで歩行訓練が出来るように、狭いスペースの中で障害物を備え、現地の地勢にあるような複雑な地面が形づくられていた。

階段とか段差の訓練だけでなく、バウンドするぐらぐら地面、ごろごろ・ごつごつ大小地面、岩の重なる地面等が想定され一順するようになっていた。

リハビリ師、ソーシャルワーカーも就職相談に応じて障害になっても義足をつくり、歩くようになるまで無料でリハビリを行い支援していく。農家の人達にとって自分達で作った装具が展示されていた。使い勝手がよく実利的であったらと想像される。これに技術者が手を加えて装具を完成していた。

福祉の成り立ちの一面を眼前で学ぶことが出来た感動は忘れない。 2014.11.24

[そしてサプライズ]

研修企画もスムーズに進行し、孤児院訪問。アーティサン職業訓練所の視察も終わり、バスが一行を乗せてサンピー村に到着した。

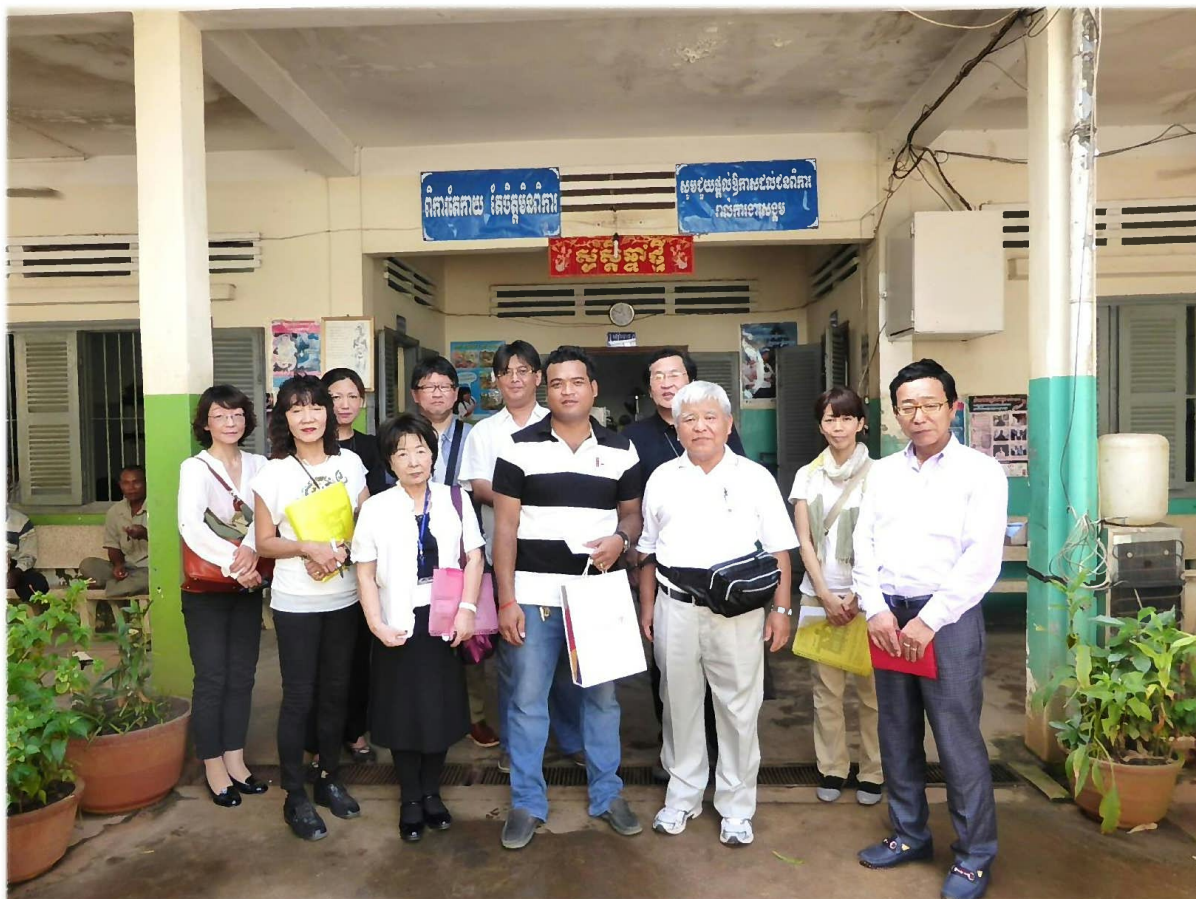
子ども達が大勢とブラウスに更紗を腰に巻いた女性達、男性はいない。その人達は井戸を掘削して完成したので今から贈呈式があるというので集まった人達だった。

井戸が岡田団長から村の人達に贈呈されました。みんなで拍手。研修ツアーの一行には村人から椰子の実にストローを差したものを1つずつみんなに手渡された。ココナツジュースを抱えて

ご馳走になりました。

中学校にも井戸がなく、川も雨季になると田んぼの水と同じになってしまう地域にあってはセメントとレンガで固定した手こぎの井戸のプレゼントは良い発案であったと思います。

今回、九州・沖縄ブロックの皆様大変お世話になり、楽しく研修させていただきましたことに感謝いたします。 2014.11.24



【一口コメント】

カンボジア…まず、思いつくものは、世界遺産アンコールワット。朝日を浴びて、徐々に明るくなる雄大な佇まい。そんなイメージの強いカンボジアですが、今回の研修を振り返って、思い浮かぶものは、カンボジアの方々の屈託ない笑顔です。子供たちの笑顔、子供たちだけでなく、多くのカンボジアの方々の笑顔が印象的でした。制度や、施設もまだ整っていないとのことでしたが、どういった支援があるのか学ばせて頂きました。

【レポート本文】

今回初の海外研修に参加させて頂き、福祉の原点に戻ろうというテーマのもとに、発展途上国の様々な施設を見学させて頂きました。1日目は、カンボジアの遺跡見学へ。まず、朝日を浴びた世界遺産アンコールワットを拝見しました。目の前の湖面に浮かぶ逆さアンコールワットもみることができ、きれいな風景に感動しました。他にも、3m近い顔の長さの塔が迎えるバイヨン、遺跡に浸食してきたガジュマルの木が有名なタ・プロム、灼熱の中での観光になりましたが、歴史深い遺跡を巡りました。

2日目は、カンボジアのシェムリアップにあるハンディキャップセンター、孤児院、アーティザン職業訓練所（シルクファーム）に見学へ行きました。

1つ目のハンディキャップセンターですが、元来は地雷により、手足の不自由な方々がリハビリに励むための施設でしたが、現在は地雷が理由というよりは、交通事故が主に占めているようです。以前はベルギーの管理であったが、現在は国が管理しているとのこと。リハビリを目的としているが、義肢の調整を中心に活動されている様子でした。

次に「子供たちの笑顔を守る会（SCSA）」という日本のNPO法人が運営をしている孤児院を訪問しました。子供たちは学校の時間で不在でしたが、途中から「ただいま」と笑顔で帰宅されていました。ちょうど代表の國本京子さんがいらっしゃり、孤児院も設立されてから歳月が流れ、今いる子供達も中学や高校を卒業し、進路を決める大切な時期に差し掛かっている。自立支援も大事なケアの一つで、子供たちが自分の夢を語り合える環境を作っていくことがとても大切。孤児院の環境も大切ですが、やはり、公的支援も必要となってくるとのお話を聞きました。

次に訪れたのは、アーティザン職業訓練所です。そこでは自立支援のための職業訓練を行い、カンボジアの伝統文化を守りつつ、正式な雇用契約の下、就労支援を行っています。今回はシルクファームを見学し、高品質のシルク商品を提供するため、絹織物が出来上がるまでの全工程を見学させて頂きました。

最後にサプライズ企画となりましたが、日本福祉施設士会九州・沖縄ブロックより、シェムリアップの村に井戸を寄贈させて頂きました。村人たちが、笑顔で迎えて下さいました。村の方々の笑顔に私たちも笑顔になりました。

こうして、カンボジアの方々の笑顔溢れる研修旅行となりました。本当に良い経験をさせて頂き、皆様に感謝します。ありがとうございました。

【一口コメント】

初めて参加させていただいた「日本福祉施設士会海外研修」でした。日頃、(株)らくだトラベルのヘルパーとして、車いすでの生活をされている方やお一人で外出が不自由な方の「外出の夢」を叶えるために、外出同行を行っているご縁から、日本福祉施設士会九州・沖縄ブロック会長の岡田様のご配慮により参加させていただきました。空港で初めてお目にかかったにも関わらず参加者の皆様に暖かくお迎えいただき、福祉がお仕事である皆様の広い志をととても感じました。

【レポート本文】

11月22日福岡空港を立ち、深夜のシムリアップに到着。深夜にも関わらず、ディズニーランドのチケット売り場のように混雑した人ごみと雑踏の中、入国審査と観光地「アンコールワット」入場のための写真撮影を行った。

早朝向かったアンコールワットでは、信じられないくらいの様々な国籍の方がカメラを片手に朝陽を待つ。小物売りの女性や子供の声を聴きながらも、長い悲しみがある歴史の中で数百年そこに立ち続けたアンコールワットを見ていると、自分がとても小さく感じられ、幸せに感謝しながら神聖な気持ちでアンコールワットの向こうから昇る朝陽を見た。

翌日、ハンディキャップセンター・孤児院・アーティザン職業訓練所の見学を行う。ハンディキャップセンターでは、リハビリ、障がい者への精神支援など、日常生活に戻るための援助が行われていた。リハビリの場所は玄関脇の屋根の下、実際に生活する環境と非常に近い状態で行なわれ、日本には見られない自立するためのアイデアが詰まっている気がした。砂地・揺れる・高低差の段の中を歩くことは、日常の中に必須の動作であり、生活の中心である働き手が、一日も早く障がいのある生活から復帰するためには非常に効果的だと感じた。

カンボジアは中学校までが義務教育であるが、学校が少ないため、午前・午後でクラス分けを行い、学生が学んでいるということであった。

カンボジアでは、子供・大人みんなが笑顔で、ついその笑顔に引き込まれてしまう美しさを一番強く感じた。自分は、このように誰かに感動を与えられる笑顔をしているのかと自問自答する日々であった。孤児院に住んでいる子供も素直でとても可愛く、孤児院を営まれている日本人の女性やボランティアで働いている方々の愛情を受けているからだろうと思った。

今回の旅では、岡田会長のサプライズで、福祉施設士会から村の方に井戸をプレゼントするために数か月前から準備されていたとのことである。大きなバスは通れない、サラサラした砂地の道の続く先に井戸が出来ていた。岡田会長と村の代表の方からのご挨拶の後、井戸の贈呈式。その辺りは井戸がなく、通常は川の水での生活が行なわれており、井戸から溢れる水に、最初恥ずかしげにしていた子供たちも歓声をあげ遊んでいた。

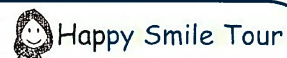
人の笑顔は、次の笑顔を生み、広がって行くことを感じた4日間の旅であった。九州弁が飛び交う旅行は、最初から最後まで笑いに包まれた、二度と味わうことの出来ない楽しい思い出と共に終了した。機会があれば、是非また参加させて頂きたい優しさに包まれた旅であり、岡田会長

を始め、同行させていただいた皆様に心から感謝の思いを伝えたいと思う。

本当に有難うございました。



《井戸寄贈について（サプライズ企画）》



井戸寄贈先家族情報

名前： Mr. Kut Toung（クット トアンさん）

家族の人数： 5名

住所： Kok Ruesey Village, Balang Commune, Bakong District, Siem Reap Province.



井戸掘削の様子その1



井戸掘削開始



圧をかけて掘ります



深く掘り進めます



パイプを挿入します



深く掘り進めます



更に圧を掛けて掘ります



あと少しです



穴掘りが完了しました



井戸掘削の様子その2



井戸部分を組み立てます



土台を均します



外側からセメントで
整えていきます



井戸部を設置します



井戸部分をレンガで固
定します



レンガ部分もセメント
で整えます



あと少しで完成です



井戸完成です！！



ဒုဗန္တုဗ္ဗသီယလိဗိုလ်
Donated by Japan



မိမိတို့ကုန်ပစ္စည်းကုန်ပစ္စည်းများကိုအိန္ဒိယနိုင်ငံနှင့်အိန္ဒိယနိုင်ငံကလေးများအတွက်အသုံးပြုရန်အတွက် နှစ်စဉ်ကုန်ပစ္စည်းများကို ဝယ်ယူပေးပါသည်။

日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック

DSWI 日本福祉施設士会
九州・沖縄ブロック

DSWI Japanese association of Directors of Social Welfare Institutions



《SCSA (Save the Children's Smile Association) JAPAN について》

2005年4月シェムリアップ市アンコールワット遺跡群の近郊に子供たちの支援施設SCSAセンター「正法学園」を開設しました。子供たちを救済し就学、職業訓練の支援活動しております。一人でも多くの子供たちを救うため、ご支援くださるようお願いいたします。

★子供たちの笑顔を守る会

組織: NGO & NPO法人
 目的: 子供たちの自立支援、
 資金: 会員の会費ならびに寄付・支援金
 活動内容
 1. 子供たちの救済と自立支援
 2. 子供たちの養育、教育支援
 3. 子供たちの心のケア
 4. 施設の運営、管理

★支援の方法

会員支援 2,000円/年会費
里親支援 2,500円/月
 (年間30,000円)
運営支援 500円/1口より
寄付支援 特に制限無し

ゆうちょ銀行苫小牧支店
 郵便番号 □座 02790-056458
 加入者名 子供たちの笑顔を守る会



NGO&NPO法人
 カンボジアの
 子供たちの笑顔を守る会

「本部事務所」
 〒 059-1271
 北海道苫小牧市澄川町 6 丁目 17-19
 TEL&FAX 0144(67)4311
 E-mail: naicebirdy60@fg7.so-net.ne.jp

「現地私書箱」
 T.O: SCSA
 POBOX: 93213
 G.P.O: SIEMREAP ANGKOR CAMBODIA
 携 帯: 012(356)022
 E-mail: phalscsa@yahoo.co.jp

「札幌連絡所」
 〒 064-0808
 札幌市中央区南 8 条西 21 丁目 3-1-106
 TEL&FAX 011-561-3168
 E-mail: yamato821@hotmail.com

ホームページ
<http://scsajapan.s202.xrea.com/>

NGO&NPO法人
 カンボジアの
 子供たちの笑顔を守る会
 Save The Children's
 Smile Association
 (SCSA)



シンボルマーク
 カンボジアは燦々と太陽の輝く国
 大きな河や湖を有し、豊かな緑に恵まれ
 そこに暮らす睡が明るく輝く子供たちの
 夢をイメージしました

人身売買の環境にある

カンボジアの子どもたちを
 一緒に救いましょう！

私たちの会は、2004年カンボジアの恵まれない人たちと関わり助けを必要としている子どもや、女性に出会いました。

貧困な農村では、今も生活区から我が子を近隣国に売ることが公然と行われています。売られた子どもたちはノルマを課せられ、物乞いや強制労働や性的虐待を強制されています。

この子どもたちは度々強制送還されますが、カンボジア国には彼らを受け入れる施設が十分になく、また新たな人買いにより売買が繰り返されています。私たちはこのように人身売買に遭った子どもや、これから人身売買に遭うおそれのある子どもたちを救済しなければならぬと痛感し「子供たちの笑顔を守る会」を設立しました。子どもたちには教育を受けさせ、集団生活を通して基本的な生活習慣を身につけ、心を癒し更生と育成に力を注いでおります。子どもたちを受け入れるには施設の維持運営管理、養育するための資金が必要です。

次世代を担う子どもたちのために多くの皆様がこの活動にご理解をいただき、ご支援ご協力いただけますよう心からお願ひ申し上げます。どうぞ、お力をお貸し下さい。

特定非営利活動法人
 子供たちの笑顔を守る会
 代表 國本 京子

SCSAセンターの子どもたちと支援者・会員の紹介

私たちが活動しているカンボジアの「SCSAセンター」は世界遺産で有名なアンコールワットのある街、シェムリアップ市から15キロほど離れたローロー村に在ります。センターには現在男子7名、女子8名が生活しております。日常生活のお世話は4名のカンボジアスタッフがサポートしています。

SCSAセンター正面



SCSAセンターの子どもたち



支援者会員の活動



アンコールワットハーフマラン参加







日本福祉施設士会

九州・沖縄ブロック 第7回海外研修報告書

2015年1月27日発行

発行：日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック 事務局

〒868-0025 熊本県人吉市瓦屋町 1106 善隣保育園内

TEL 0966-22-3573 FAX 0966-22-3705

【E-mail】zenrin@mx22.tiki.ne.jp

